沼部　幸博　先生

略歴

1983年　日本歯科大学歯学部　卒業
1987年　日本歯科大学大学院歯学研究科博士課程　修了
1989年　日本歯科大学歯学部歯周病学教室　講師
1989年　カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）歯学部　客員講師
1994年　日本歯科大学歯学部歯周病学教室　助教授
2005年　日本歯科大学歯学部歯周病学講座　教授
2006年　日本歯科大学生命歯学部歯周病学講座　教授（所属名変更）

学会活動

日本歯周病学会専門医（指導医）
日本歯科保存学会専門医（指導医）
日本レーザー歯学会専門医（指導医）

日本歯周病学会会誌に投稿しませんか！

日本歯科大学 生命歯学部 歯周病学講座
沼部　幸博

本講演では，「研究・臨床の取り組みを論文にし，それが日本歯周病学会会誌（以下学会誌）に掲載されることにどのような意義があるのか？」に焦点を当てながら，編集委員長の立場から学会誌の位置づけをもう一度見直し，1人でも多くの学会員の作成論文を学会誌投稿・掲載へと誘う道筋について考察したいと思う。

学会誌は平成19年からJ-STAGEを用いた完全電子投稿システムに移行し，第57巻からは紙ベースでの学会誌発刊も中止され，完全オンライン化（電子ジャーナル化）されている。現在学会誌は第60巻を数え年4回の発刊だが，一時期は毎号多くの論文が掲載された学会誌も，この原稿の執筆時点での59巻4号における掲載論文数は6編，そして原著論文数は「0」である。また最近の他の号でも，原著は数編に過ぎない。これは本学会誌に限らず，本邦の学術雑誌の多くの傾向でもあり，一定の投稿数が確保できず苦戦をしている。その理由は，原著論文はIF付きの欧文誌に投稿した方が，「読者が全世界にいる」，「研究業績としての評価が上」というもので，常に一段階上を目指している会員，とくに若い研究者が欧文誌投稿に志向する傾向は理解できる。しかし，学会誌は学会を代表する顔であり，その会員の活動内容を発信する場であり，それを通じて会員の研究，臨床活動を知り，お互いに研鑽を積んで来た伝統があり，それを絶やしてはいけないと考える。本学会は日本歯科医学会の専門分科会の1つだが，専門分科会の承認基準に，雑誌（機関誌）を年1回以上定期に刊行し，原著論文などが原則として年20編以上掲載されていることなどが挙げられている。この基準からすると，現在学会誌の状況はぎりぎり，またはその基準を下回る可能性があり，別に定められた，「学会員による他の学術雑誌（欧文誌など）に掲載されている論文を合わせてのカウントが可能である」とする内規に救われており，編集委員会としては忸怩たる思いがある（本年度から，既承認学会で専門分科会の承認基準が維持されているかの再評価が実施されている）。言うまでもなく専門分科会を誇るのであるならば，学会の顔である学会誌の充実を図りつつ，同時に積極的に世界へも研究内容を発信することが理想であろう。

日本歯周病学会では日本歯周病学会会誌賞を設け，毎年，その年度の優れた投稿原著論文2編に対して賞が与えられる（副賞は“MORITA Award”）。若手研究者にとってはその賞への挑戦は，良き登竜門と考えられることから，その機会をさらに活用することを推奨する。

学会誌にはその他にも多数の存在意義があり，それらを会員に幅広く浸透させ，研究や症例を論文化するモチベーションを向上させるとともに，学会誌投稿への魅力をさらに高めて行くことも，編集委員会の重要な役割である。

村上　伸也　先生

略歴

1988年　大阪大学大学院　歯学研究科　修了
1988年　米国国立衛生研究所（NIH）博士研究員
1990年　大阪大学・助手　歯学部
1992年　大阪大学・講師　歯学部附属病院
2000年　大阪大学・助教授　大学院歯学研究科
2002年　大阪大学・教授　大学院歯学研究科
2016年　大阪大学歯学部附属病院　病院長

国際誌編集委員

Journal of Periodontal Research: Editor-in-Chief
Journal of Periodontology: Editorial Advisory Board
Journal of Clinical Periodontology: Editorial Board

How to get your first research paper published
ー歯周病学研究の将来を担う若手研究者への応援にかえてー

大阪大学 大学院歯学研究科 歯周病分子病態学
村上　伸也

研究には様々なスタイルがあります。自分の学術的興味の赴くまま（curiosity-oriented）進める研究もあるでしょうし，定められた目的を達成するための（mission-oriented）な研究もあると思います。しかしながら，そのいずれに属する研究であろうとも，研究費・時間・そして精力を投入して得られた貴重な成果を公共の財産とするためには，論文等にその成果を取りまとめて公表することが極めて大切なのは変わりがありません。

個々の研究（プロジェクト）の成果を如何に論文としてまとめるかは，研究者それぞれの信条・好み・スタイル，さらには投稿先として希望するJournalのAims and Scopeにも影響されるでしょうから，画一的な雛形があるわけではありません。しかしながら，一般論として知っておくべき論文投稿に関する「お作法」をよく理解した上で，論文作成，投稿，さらには査読者への返答を準備することは，その論文をacceptしてもらう確率を高める上で極めて大切なことです。

今回のシンポジウムでは，歯科関係の国際誌が現在おかれている状況や，研究論文を書くときのちょっとしたヒント，査読者から好意的な評価を受けるために注意しておくべき事などについて，国際誌のEditor-in-Chiefとして私が感じていることをお話しさせていただきます。そして，これから論文作成を予定している若手研究者あるいは臨床家の方々のご質問に，可能な限りお答えしたいと思います。